

鎌倉市民に贈る
鎌倉の音楽家による
コンサート

ピ ア ノ 海老原みほ
ヴァイオリン 磯 絵里子
ヴァイオリン 神谷 未穂
バリトン 末吉 利行
ピ ア ノ 野村 麻里
チ ェ ロ 藤村 俊介

古谷誠一指揮
鎌倉交響楽団

2002年 3月30日(土)

午後 2 時 30 分開演

❖ 鎌倉芸術館大ホール ❖

主催● 鎌倉市芸術文化振興財団

協力● 鎌倉音楽クラブ

Program

I. ピアノ

ピアノ 海老原みほ

- E. グラナドス / Enrique Granados / スペイン舞曲集 より
Danzas Españolas
No.1 メヌエット Minuetto
No.2 オリエンタル Oriental
No.8 アストゥリアーナ Asturiana
- R. スティーヴンソン / Ronald Stevenson / ピーター・グライムス・ファンタジー〜ブリテンのオペラのテーマによる〜
Peter Grimes Fantasy

II. ヴァイオリン・デュオ

ヴァイオリン 礒 絵里子
ヴァイオリン 神 谷 未 穂

- J.M. ルクレール / J.M. Leclair / 二つのヴァイオリンのためのソナタ イ長調 op.3-2
アレグロ〜サラバンド・ラルゴ〜アレグロ
- Jean-Marie Leclair / Jean-Marie Leclair / Sonates à 2 violons sans basse
Allegro-Sarabanda largo-Allegro
- B. バルトーク / Béla Bartók / 二つのヴァイオリンのための44の二重奏曲 より
44 Duos
No.26 でも親愛なるおばさん(からかいの歌) Ugyan édes komamasszony
No.43 ピッツィカート Pizzicato
No.36 バグパイプは響く Szól a duda
- W.A. モーツァルト (玉木宏樹 編曲) / Wolfgang Amadeus Mozart / トルコ行進曲
Turkischer Marsch

III. 独唱とピアノ

バリトン 末 吉 利 行
ピアノ 野 村 麻 里

- 杉山長谷夫 / 出 船 (勝田香月 詩)
- 平井康三郎 / 平城山 (北見志保子 詩)
- 梁田 貞 / 城ヶ島の雨 (北原白秋 詩)
- 大中 恩 / 昨日いらっして下さい (室生犀星 詩)
- 中田 喜直 / 木 兎 (三好達治 詩)

— 休 憩 —

IV. オーケストラ

鎌倉交響楽団
指揮 古 谷 誠 一

- A. ドヴォルジャーク / Antonín Dvořák / スラヴ舞曲 第8番 op.46-8
Slovanské tance

V. チェロとオーケストラ

チェロ 藤 村 俊 介
鎌倉交響楽団
指揮 古 谷 誠 一

- A. ドヴォルジャーク / Antonín Dvořák / チェロ協奏曲 口短調 op.104
アレグロ〜アダージョ・マ・ノン・トロppo〜アレグロ・モデラート
Violoncellový koncert
Allegro-Adagio ma non troppo-Allegro moderato

プログラムおぼえがき

◆グラナドスは、スペイン国民主義を代表する作曲家で優れたピアニストでもあり、第一次世界大戦でリポートに撃沈されて悲運・劇的な最後を遂げました。「12のスペイン舞曲」は彼の最も有名なピアノ曲で、太陽の国スペインらしく、光と影が交錯し、一曲一曲は短いながらも情熱と哀愁が同居する珠玉の小品集となっています。

スティヴンソンはイギリス現代の作曲家で、同じイギリスのブリテンのオペラ「ピーター・グライムス」(漁師ピーターにまつわる悲劇)の、人の叫び声、村人の悪意に満ちた噂、重なる悲劇、最後にはイギリスのどこまでも続く灰色の海に鳴り響く霧笛…等をブリテンの素材を使ってピアノ曲として見事に凝縮することに成功しています。

◆18世紀前半のヴァイオリニストで作曲家ルクレールは、イタリア風の美しい様式に舞曲を含むフランス様式を融合させた、独創的で繊細なヴァイオリン曲を残していますが、通奏低音(チェンバロ、ヴィオラ・ダ・ガンバなど)を含まない「二つのヴァイオリンのためのソナタ」を12曲作っています。今日はその中のop.3の6曲から**第2番イ長調、全3楽章**です。

バルトークは、ハンガリー国民楽派の作曲家としてばかりでなく、偉大な現代音楽の巨匠と言わなければなりません。そのバルトークが、ドイツの教育家の委嘱を受けて作ったという「二つのヴァイオリンのための“44の二重奏曲”」はハンガリー、スロヴァキア、ルーマニア等の民俗的要素と、教会旋法を含む正統的な作曲やあらゆるヴァイオリン技法を踏襲し、しかも完璧な芸術性に裏付けられ、それゆえにまた、真に教育的でもある傑作と言えましょう。何曲かをグループにして、曲の間をあけずに演奏するとよいでしょう…というバルトーク自身の勧めに従った今回の選曲は、形の上からも、音楽性からも素晴らしいコントラストをなして聴き手を捉えるに違いありません。

ご存じモーツァルトの「トルコ行進曲」は、むしろアンコール向きにアレンジされていて、ピアノ以上に楽しいステージになりそうです。

◆歌は、音楽の、そして芸術の原点…と言われます。何故ならば、“歌う”の語源は“訴う(うとつ)”で、心から心に訴える人の働きが芸術である…という説もあるからです。ですから「歌」に差別はありません。例えば「出船」の哀愁は、その辺の演歌と少しも違いません。歌いようによって演歌に近い歌でも芸術歌曲になるのです。「平城山」は、奈良朝・平安朝を回想しながら、恋しい人への逃げられぬ想いを歌う…昔を思うことで今の悩みが癒されるのでしょうか…。「城ヶ島の雨」は、あまりにも有名になって、“…わたしの忍び泣き”“濡れて帆上げた…”という詩が、衣ぎぬの別れで船出した人を見送り、利休鼠色の城ヶ島の情景に重ねて切々と泣く心情を訴えてい

るのを忘れてはいけません。一転して室生犀星・大中恩の「昨日いっらして下さい」では、過去と未来が逆転する滑稽が、皮肉と軽妙のうちに、時間の哲学を垣間見る“怖さ”を含んでいると思うのは考え過ぎでしょうか…。山田耕筰に匹敵する日本歌曲の世界を描き上げた中田喜直の「木兎」はみみずくの鳴く声が、夜、ひとり物思いにふける詩人の心に「おまえは、一体、何をしにこの都にもどってきているのだ…また昔と同じように詩おうというのか…」という自分への問いかけ…すなわち三好達治の虚無感が呼びかけるのです。この精神性と孤独な雰囲気に着した中田の音作りも見事という他はありません。

◆本日のプログラムには、期せずしてグラナドス、バルトーク、ドヴォルジャークなど、いわゆる「国民楽派」の巨匠が並ぶことになりましたが、この「国民楽派」の名称そのものが、本来西欧中心の芸術感に根差しているため、ドイツ、フランス、イタリアと雖も世界的に見ればいづこもローカルな国々ということになりましょう。ただ、現代のように世界の隅々まで対等に音楽が評価されるようになるために、先に上げたいいわゆる「国民楽派」の優れた才能がその端緒を開いたことも事実です。

ドヴォルジャークなど、むしろイギリスやアメリカで大いに認められ、有名になったので、「新世界交響曲」を例に上げるまでもありません。しかし、ドヴォルジャークはいつも生地ボヘミアへの郷愁が堪え難く、ブラームスの「ハンガリー舞曲」の成功を見るにつけ、スラヴ民族の民謡や民俗舞曲の資料を集め、これもブラームスに倣ってスケッチをピアノ連弾で書き、16曲を「スラヴ舞曲集」として出版したのです。op.46-8番のこの曲は、激しい弦の主題と、優美なオーボエに始まる第2主題が交互に対比の妙を示して展開されます。

同じドヴォルジャークの「チェロ協奏曲 口短調 op.104」は、彼の代表作であるばかりでなく、数少ないチェロ協奏曲の傑作として、沢山のファンを持っています。これは、前述のようにアメリカ在住時代に作ったので、アメリカン・インディアンの民謡や黒人霊歌についての関心と故郷ボヘミアの民俗音楽が自然に融合され、生来持っている彼の泉が湧くようなメロディー性と、管弦楽法と構成力の熟達、更にチェロの難しい技法を駆使したヴィルチュオーズ風な効果が加わり、演奏家にとっても最も弾きごたえのある名曲となったのです。第1楽章は、クラリネットで第1主題、ホルンで5音階の第2主題が奏された後、朗々と主役のチェロが登場します。その劇的な発展や、第2楽章のボヘミアへの望郷の歌とも言える素晴らしいアダージョ、黒人霊歌の旋律とボヘミアのリズムを巧みに融合させた第3楽章、と言うように説明する材料に欠くことはありませんが、何はともあれ、チェロの妙技とドヴォルジャークの情熱に無条件に聴き惚れて頂きたいものです。(高木 幸三記)

出演者プロフィール(出演順)



海老原 みほ(えびはら みほ) ピアノ
鎌倉市出身。6歳よりピアノを始め、高橋英子、渡辺康雄の各氏に師事。1987年渡英、英国王立音楽院に入学。ピアノをフランク・ウィボウ、伴奏法をジェフリー・ブラットリー、ハーブシコードをヴァージニア・ブラック各氏のもとで学ぶ。在学中、数々のコンペティションで上位入賞し、91年優秀な成績で卒業。94年ニューヨークでのアメリカ・ランドマーク・フェスティバルに参加。

95年イタリアで行われたイブラ国際ピアノコンクールで3位入賞。ソロ活動の他、室内楽でも杉谷隆興(セント・ルイス交響楽団コンサートマスター)、ロバート・ギブス(ロイヤル・バレエ・シンフォニア、コンサートマスター)等著名音楽家とのデュオ・リサイタル、サイモン・マッケイブ氏の2台のピアノのための協奏曲の初演をロンドンで行うなど、作品発表にも積極的に活動している。



磯 絵里子 神谷未穂

磯 絵里子(いそ えりこ) ヴァイオリン

桐朋学園大学卒業後、安田生命Q.I.文化財団の奨学金を得て、ブリュッセル王立音楽院に留学、修士課程を首席修了。文化庁派遣芸術家在外研修員として引き続きオイストラフ教授に師事研鑽を積む。マリア・カナルス国際コンクール、日本音楽コンクール等内外のコンクールに入賞。1995年デビューリサイタル以来ブリュッセル、ベルリン、アムステルダム他でリサイタル、内外のオーケストラと協奏曲の共演。様式感と歌心に溢れ、力強い技術によるシャープな音楽性が際立っている。これまでに、江藤俊哉、I. オイストラフ、徳永二男、原田幸一郎、W. バリリ他各氏に師事。

神谷 未穂(かみや みほ) ヴァイオリン

桐朋学園大学卒業後、ハノーファー音楽大学を首席卒業。文化庁派遣芸術家在外研修員として引き続きハノーファーに留学。安田生命Q.I.文化財団の奨学金も得て研鑽を積む。ティボール・ヴァルガ国際ヴァイオリンコンクールにてバガニー二賞等内外のコンクール・音楽祭で多くの受賞。数多くのリサイタル、内外のオーケストラと協奏曲の共演。優れたリズム感としなやかな感覚に加え、厚みを持った個性が光っている。これまでに江藤俊哉夫妻、C. アルテンブルガー、G. コリア各氏に師事。

デュオ・プリマ Eri & Miho

従妹同士の絵里子・未穂は、NHK・TV、FM、サイトウ・キネン・オーケストラ、内外の音楽祭等にデュオ出演し注目を集め、今後二人での演奏活動が大いに期待されている。



末吉 利行(すえよし としゆき) バリトン

東京芸術大学卒業、同大学院修了。加中良輔、平野忠彦、田中万美子、落合武彰の諸氏に師事。パッサ「マイイ受難曲」「ヨハネ受難曲」、ハイドン「天地創造」「四季」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト、フォーレ、ヴェルディ、デュルフレ、ドヴォルジャーク「レクイエム」、メンデルスゾーン「聖パウロ」「エリア」等、多くの宗教曲及び「第九」のソリストとして定評がある。オペラでは、「ドン・ジョヴァンニ」のタイトルロール、「フィガロの結婚」のフィガロ、伯爵、「ラ・ボエーム」のマルチェッロ、ショナール、「ファウスト」のヴァランタン、「蝶々夫人」のシャープレス、「トゥーランドット」の大巨臣等、多くのレパートリーを持つ。存在感ある歌唱と適確な演技力で注目を集め、1997年、ジローオペラ賞・新人賞を受賞。また2000年4月には、県民ホールで高木東六作曲、オペラ「春香」に出演。愛知県芸術大学助教授、東京芸術大学非常勤講師、二期会会員、青の会会員、横浜シティオペラ会員。

50歳以上のタイトルロール、「フィガロの結婚」のフィガロ、伯爵、「ラ・ボエーム」のマルチェッロ、ショナール、「ファウスト」のヴァランタン、「蝶々夫人」のシャープレス、「トゥーランドット」の大巨臣等、多くのレパートリーを持つ。存在感ある歌唱と適確な演技力で注目を集め、1997年、ジローオペラ賞・新人賞を受賞。また2000年4月には、県民ホールで高木東六作曲、オペラ「春香」に出演。愛知県芸術大学助教授、東京芸術大学非常勤講師、二期会会員、青の会会員、横浜シティオペラ会員。



野村 麻里(のむら まり) ピアノ

東京学芸大学卒業、同大学院修了。宮田清、長与咲子の各氏に師事。同大学院修了生有志によるジョイント・コンサートを1999年まで15回にわたって企画、出演。2000年リサイタル開催。独奏、アンサンブルの研鑽を積みながら、合唱、声楽の伴奏を主として演奏活動を行っている。現在、品川コール・ママン、女声コーラス「麦」のピアニスト、千葉経済大学短期大学部非常勤講師。



藤村 俊介(ふじむら しゅんすけ) チェロ

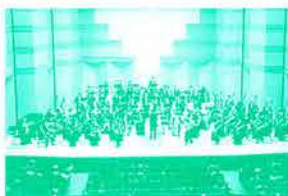
1963年生まれ。チェロを安田謙一郎氏に師事し、桐朋学園大学音楽学部卒業。日本演奏連盟賞、第21回東京国際室内楽コンクール入選、第58回日本音楽コンクールチェロ部門第2位に輝き、桐朋学園オーケストラ、九州交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団などと協演。90年東京文化会館にて初のリサイタルを開催。93年アフィニス文化財団の研修員としてドイツに留学し、メロス・カルテットのペーター・ブック氏に師事。現在、NHK交響楽団次席奏者(フォア・シュピラー)、フェリス女学院大学音楽学部講師。



古谷 誠一(こたに せいいち) 指揮

東京大学文学部卒業。在学中から指揮を三石精一氏に師事。同時に桐朋学園オーケストラ研究生(指揮専攻)として、指揮を秋山和慶、堤俊作、尾高忠明の各氏に、作曲・ピアノを故矢代秋雄、三善晃、末吉保雄の各氏に師事。

二期会中四国支部のモーツァルト「魔笛」公演を指揮して指揮活動を始める。以降、長門美保歌劇団の「チャルダッシュの女王」、日本バレエ協会での「バヤデルカ」「シセラザード」、日生劇場での東宝ミュージカル「マイ・フェア・レディ」など活動の場を広げている。「ドン・ジョヴァンニ」「ボエーム」「椿姫」等のオペラから「サウンド・オブ・ミュージック」「アニー・ボレー」と等のミュージカル、「カルミナ・ブラーナ」、ブリテンの「戦争レクイエム」、ヤナーチェクの「グラゴール・ミサ」、ヴェルディ、ペリオーズの「レクイエム」などの大掛かりな舞台作品まで、手がけた作品はあらゆるジャンルにわたっている。最近では7年間にわたって日本オペレッタ協会の定期公演を指揮して高い評価を得る。また、東京シティフィル、新日フィル、九州交響楽団、関西フィルなど数多くのオーケストラを指揮。1997年10月にはカーネギーホールにて、セント・ルークスオーケストラ(ニューヨーク)を指揮し、絶賛される。昭和音楽大学、愛知県立芸術大学各講師を経て、現在、名古屋芸術大学教授、セントラル愛知交響楽団正指揮者。



鎌倉交響楽団(管弦楽)

市民のアマチュア管弦楽団として昭和38年に発足。現在団員は120名を超え、春秋の定期演奏会、ニューイヤークンサート(2003年からはファミリーコンサート)、幼稚園協会による園児のための演奏会、年2回の団員による室内楽演奏会など、常任指揮者の古谷誠一氏のもとに幅広く鎌倉の音楽文化のリード役として活動を続けている。また、今年には創立40周年にあたり、なお一層のプログラム充実を計画している。